話題・トピックス

「城下町の研究で」

理学博士と県文化賞

＝島田豊寿先生＝

写真は島田豊寿先生

国立高知高専の教授で、市文化財審議委員の島田豊寿先生（末松旧姓松本）は、東京教育大学からこの春理学博士の称号をうけられました。

先生は若いときから農村聚落の発生や、城下町の構造に興味をもたれ、とりわけ戦国城下町と近世城下町の研究は、十五年の歳月を経て大成されたもので「城下町の歴史地理学的研究」などの著書として発表されたところ、学界の評価も高く、とくに東京教育大学から学位論文として提出するようにすすめられ、かたく辞退をされておられましたが、ぜひ学界のためにとのたってのすすめもあって「戦国城下町の都市域構造論」を主論文に「城下町の歴史地理学的研究」を副論文として提出され、学外者（同大学出身外）として異例とされる論文にパスし、理学博士の学位を授与されました。

数少ない理学博士の誕生をよろこび、先生の研究がいかに価値高いものであるかをあらためて知るとともに、その栄与をたたえたいと思います。

なお、市文化財審議会刊行の「田村城館と守護代町」は先生の快心の研究物といわれているものです。市民の方々の一読をおすすめします。

ところで先生はこの価値ある研究によって、去る十一月三日、県の文化賞を授与されました。

母子福祉活動を推進しよう

母子福祉連合会を結成

市内に住む「寡婦家庭や母子家庭」のおかあさんたちが、去る十月二十六日中央公民館にあつまって、母子福祉連合会を結成しました。

こんどつくられました母子福祉連合会は、このほど制定をみました寡婦福祉資金の貸付け制度の実施を機会に、市福祉事務所の指導と各地区の母子相談員の努力によって各地区に母子福祉の協議会をつくり、その連合体として発足をみたもので、寡婦五百四、母子百四十八、計六百五十二世帯の人たちが加入しています。

ここで「母子家庭」というのは二十歳未満の児童を持つ配偶者のいない女子の家庭で、母子福祉法の対象となるものです。

また「寡婦家庭」とは、子どもが二十歳に達し、母子福祉法の対象外となった四十歳以上の寡婦の家庭をいいます。

写真は母子福祉結成大会

なお、子のない、配偶者を失った女子も該当します。

いつの世でも女手一つで子どもを育てあげることはなみたいていの苦労ではできない。とくに今日の激動する社会のなかで、相談相手もなく、社会的にも経済的にも不安定な生活を送っているおかあさん方が、母子相談員を中心に、お互いに助け合って行くことはまことに明るく力強いことです。

この会に加入できる方で、まだ加入されていない方全員が加入され、十分な社会保障を要求し、子どもたちを強く、明るく育てあげるとともに、おかあさん自身のしあわせを高めましょう。

結成総会で選出されました役員はつぎの方たちです。

▼会長久万富士（日章）▼副会長小笠原美智（同）足利多美（岡豊）

▼会計西山三重（三和）▼会計監査溝淵里子（大篠）小川政子（岩）

後免町公民館完成

＝盛大に開館式＝

新築中の後免町公民館はこのほど完成し、十一月二十日、その落成式が行なわれました。同公民館は、これまで明治十八年に建造された商家を改造して、使用していたもので、手狭で、不便であったため、まえまえから改築の話がすすめられていたものですが、ことしようやく実現し、鉄骨二階建ての立派なものに生まれかわりました。なお、落成式にあたって、功労のあった山下熊太郎、山内一久の両氏と土長医師会に対して市長表彰がありました。

（写真は新装なった後免町公民館の正面）

話題・トピックス

☆　市内の子供会の指導者たちによって、このほど、子供会連絡協議会が結成されました。

会長、笠原清一（長岡校下子供会連合会長）副会長浜田重彦（大篠校下同）下田誠男（久礼田校下同）

☆　市の社会教育課主催の市社会教育大会がこのほど中央公民館で開らかれました。

講演する森戸夫人

当日は記念講演に評論家、森戸登紀子さん（本市伊達野出身、元文部大臣森戸辰男氏夫人）の「社会人、家庭人としてよりよく生きるためには」という講演に深い感めいをうけました。

☆　市制10周年を記念したNHK素人のど自慢コンクールは11月8日午後2時30分から市民体育館に1,300人をあつめて行なわれました。

（写真は、コンクール風景）

☆　このほどひらかれました県消防競技大会に出場しました、市代表の南海分団（砥久祐之進分団長）は消防操法で待望の優勝を遂げました。

写真は犬の交換会風景

☆　10月26日市民体育館の広場で始めての犬の交換会が開かれました。交換会は不用犬を手放して愛犬家の人たちに飼っていただこうということで始められたもので、小なりの犬が新しい飼い主のもとに引き取られてゆきました。

なかにはコリーやセントーなど血統書付きの犬もみられました。

最優秀賞に山本さん

＝市制十周年写真コンテスト＝

さきに市制十周年を記念して、その記念行事の写真を募集していました。南国写真会の写真コンテストは六十点ほどの応募があり審査の結果入選二十三点を選らび、最優秀賞に山本次男（田村）さんの「売れるかのう」＝写真＝が決まりました。

▼優秀賞（二点）「客を待つ老人」小松義広（野市町）「南国おどり」沢村武（田村）

▼入選（二十点）北村起章、森国修、山本次男、筒井真道、川瀬一水、東村達夫、沢村武、沢村良章（以上）池本大明（以上）田下崇弘（以上）武市良典（以上）野村[illegible]明（以上）

市の人事異動

十一月一日付で

市は[illegible]の設置にともなって、十一月一日付で市職員の[illegible]動を発令しました。

【管　理】

▼厚生課▲　同和対策本部事務局長兼同和対策係長　[illegible]春義（一少年補導センター所長　溝淵原己（福祉事務所次長）

▼税務課▲　第二賦課係長　浜口正義（総務課管財係長）

▼総務課▼　管財係長（兼務）島内日出見（同課財政係長）

▼福祉事務所▲　次長北村泰博（税務課第二賦課係長）

【主　管】

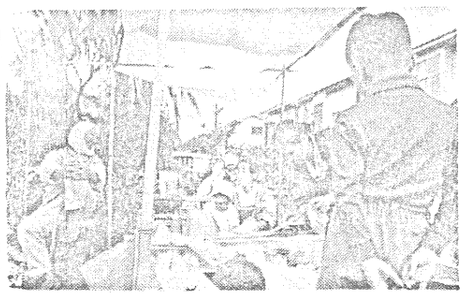
▼簡行支所▲　本田幸男（厚生課主幹）

【主事・主補】

▼厚生課▼　岡崎総一（教委社会教育課）星沢豊穂（市民課）

▼市民課▲　竹中守（総務課）

▼三和支所　神田敏子（厚生課）



コント　くれないの花

一人息子の突然の死は昼と夜の境よりももっと明確に、この家の生活の彩りを変えてしまった。きのうまでの希望と歓喜に充溢した日々はどこへ行ったか、この家の平和と幸福とは親子三人の共用のはずだったが、それを根こそぎ持ち去ったのは息子の死である。

信吉が二度目に応召した後で息子は生まれたが、終戦の後、元気で帰還した信吉はしかしもう子供は造らなかった。

五反百姓の境遇にあったかれらはせっせと働いて田畑を増やし、金を貯めることがおのづからの生活の目標となったから、勤労と節約だけが必要であった。そのために子供は跡継ぎだけでよかった。

しかしかれらが息子に接する態度は甚だ寛大であった。自分達では生涯かかっても成しとげ得なかったもう一つの夢を老夫婦の息子に托したのである。

惜しみない浪費によって息子を大学へ入れ、卒業後区市の高校の教師として就職が決まった時、老夫婦の夢は更に大きく膨らんだ。後にはり、[illegible]然、どこの嫁にも負けないうつくしい嫁を捜し当てることが残されている。

それから二年の後、老夫婦は更に激しい体力の消耗によって額に深い皺を刻んだが、その間に家の新築もでき、嫁となるべきうつくしい相手も決まった。息子はいつか乗用車で通勤するようになっていて、嫁は時々その車に乗せられてこの家を訪れたが、その度に老夫婦の満足感は頂点に達した。

秋の挙式の日取りも決まったそんなある日、だが、突然に不幸がやってきた。

息子の車が帰途トラックと正面衝突してしまったのである。それは息子の飲酒運転による過失であったが老夫婦が駆けつけた時、息子は意識不明だったがふいに恐ろしい力で暴れだし、うわ言を言って呻いた。日頃おとなしい息子の突然の狂気のような発作に老夫婦はすっかり動てんした。脳内出血をしていた。

次に許婚の娘が駆けつけた時には息子はすでに息を止めていた。娘はくれないの花が散ったように遺体の上に泣きくずれたが、その光景だけがいつまでも老夫婦の眼の底に残った。

十市　梨夫